

道徳科を中心とした提言（毛内 嘉威 先生）

1 はじめに

令和4年度、秋田市教育委員会の委嘱を受け、小学校2校、中学校2校の計4校に訪問する機会をいただいた。4校とも、「特別の教科 道徳」（以後「道徳科」）としてその特質を生かした「主体的・対話的で深い学び」のある授業が展開され、「道徳科を要とした学校の教育活動全体を通じた道徳教育」に取り組まれていた。

学校教育は、教育基本法にある通り、「人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成」を期して行われている。人格の完成の基盤となるものが道徳性であり、道徳性を育てることが道徳教育の使命である。

道徳科が目指すものは、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の目標と同様によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことである。

各学校における道徳科を要とした道徳教育では、学校教育における様々な課題に対して、実効性のある指導計画（全体計画・別葉・年間指導計画）を作成して、学校が一つのチーム（チーム学校）として適切に指導・対応することである。

2 チーム学校で取り組む道徳教育

(1) 校長方針の明確化

道徳科を要として教育活動全体を通じて道徳教育を効果的に展開するには、道徳教育の目標実現のために「チーム学校」として組織的に取り組むことが重要である。

校長は、道徳教育の改善・充実を視野に入れながら、関係法規や社会的要請、学校や地域社会の期待などを踏まえ、学校の教育目標との関わりで、道徳教育の基本的な方針を示すことになる。この基本的な方針を明示することにより、全教職員が道徳教育の重要性について認識を深め、学校の道徳教育の重点や推進すべき方向について共通理解し、具体的な指導を行うことが可能となる。

このとき、校長が道徳教育に全力で取り組もうとする強い姿勢を示すことが大事である。その第一歩が、道徳教育推進教師を中心にした推進体制の構築であり、道徳教育の基本方針を全教職員で共有することにつながる。道徳教育推進教師を中心に教職員一人ひとりの持ち味を生かして児童生徒と組織的に関わることで、児童生徒が将来に夢や希望をもち、何事にも主体的に取り組むなど、教育効果は大きくなる。逆に、校長が道徳教育に後ろ向きだと、道徳教育の充実は難しくなる。

(2) 道徳教育推進教師を中心とした全教職員による協力体制の整備

チーム学校として道徳教育に取り組むためには、道徳教育推進教師を中心とした全教職員による協力体制の整備が必要不可欠となる。道徳教育推進教師の役割を明確にし、全教職員の参画、分担、協力の下に充実が図られるよう機能的な協力体制を整備することである。

道徳教育を推進するためには、機能的な協力体制を構築し、指導計画の作成、道徳科の充実、道徳用教材の整備・充実・活用、道徳教育の情報提供や情報交換、道徳科の授業公開、家庭や地域社会との連携、道徳教育の研修の充実、そして道徳教育における評価など、学校の実情に応じて全教職員が積極的に関わるができるようにすることが大切である。

3 道徳教育の全体計画、別葉、年間指導計画

道徳教育の指導計画とは、全体計画、(全体計画の)別葉、年間指導計画のことである。全体計画・別葉を作成し、各教育活動に一貫性と関連性をもたせ、各学校における特色ある教育活動を具体化することで教育効果は大きくなる。また、全体計画に基づいて道徳科の年間指導計画が作成される。

(1) 全体計画

全体計画は、学校で道徳教育をどのように進めていくのかなど、学校の道徳教育の基本方針や方策などを総合的に示した教育計画である。

チーム学校として道徳教育の目標を達成するための基本的な方針を示し、学校として何に重点を置いて取り組むのか、工夫することや留意すべきことは何か、道徳教育を進める上で役割をどのように分担するか、家庭や地域社会との連携をどのように進めていくかなど、効果的な道徳教育を推進する上で必要な戦略・戦術を組むことが大切である。

(2) 別葉

全体計画の「別葉」とは、学校における道徳教育の推進にあたっての重点、各教育活動における役割とその関連のあり方、各教科等における道徳教育に関わる指導の内容および時期を整理したものである。別葉を作成することにより、道徳教育の推進体制および家庭や地域社会等との連携のための体験活動や実践活動の時期等が視覚的に捉えやすくなり、年間を通して活用しやすくなる。チーム学校として道徳教育を展開するためにも、全体計画や別葉は必要不可欠である。

(3) 道徳科の年間指導計画

道徳科の年間指導計画は、道徳科の指導が、道徳教育の全体計画に基づき、児童生徒の発達段階に即して計画的、発展的に行われるように組織されたものである。年間指導計画は、道徳科で指導する内容について児童生徒の実態や多様な指導方法を考慮しながら、学年段階に応じて構成した主題を年間にわたって適切に配列し、学習指導過程を示すなど道徳科の学習指導案を立案する拠り所ともなる。

4 道徳科におけるカリキュラム・マネジメント

道徳科の目標は、他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことである。そのため、道徳的諸価値の理解を基に、答えが一つではない道徳的な課題を児童生徒一人ひとりが自分自身の問題と捉え、向き合う「主体的・対話的で深い学び」(＝「考え、議論する道徳」)への質的転換が求められている。

質の高い道徳授業の構築には、明確な意図をもって指導の計画を立てること、授業での具体的な児童生徒の学習状況を想定し、学習指導過程や指導方法を工夫しながら、道徳科の主体的・対話的で深い学びを構想すること、さらに、授業の振り返りの観点(評価の視点)を立てて授業に臨むことが重要である。このように指導と評価の一体化の視点をもった道徳授業の実現のためには、道徳科におけるカリキュラム・マネジメントが必要である。授業計画から実施、評価、改善までを一つのサイクルととらえ、授業改善や児童生徒の成長に生かしていくことが大切である。

5 道徳授業のPDCAサイクルの実現

道徳科におけるカリキュラム・マネジメントとは、道徳授業のPDCAサイクルの

実現の考え方（道徳科における指導と評価の一体化）を取り入れ、児童生徒一人ひとりが幸せな人生を歩めるよう、よりよく生きる基盤となる道徳性の育成を責任をもって担うことである。

（１）「P」—道徳授業の計画（Plan）

道徳授業のねらいは、よりよく生きるための基盤となる道徳性を育てることであり、そのためには児童生徒の実態把握等に基づく指導計画（全体計画、別葉、年間指導計画）が必要不可欠である。それは、教職員が一丸となって、学校教育目標の具現化を図ることでもある。

まずは、学校・家庭・地域の実態から、どのような児童生徒を育てていくのかを明らかにし、道徳教育の重点目標や重点的に指導する内容項目を設定して取り組むための計画（全体計画、別葉）を立て、全教職員で共通理解することが大切である。

次に、主たる教材としての教科書を使用した道徳科の年間指導計画を作成する。作成にあたっては、一つの道徳的価値を焦点化した指導や関連する道徳的価値について考える指導、一つの内容項目を複数時間位置付けた計画、効果的な教材の活用方法などを考えたい。こうして作成した年間指導計画に基づき道徳授業を実施する。

（２）「D」—道徳授業の授業実践（Do）

道徳授業の質的転換を表す「主体的・対話的で深い学び」（＝「考え、議論する道徳」）は、全ての教科等の学習・指導改善の視点であり、指導と評価の一体化に基づく授業づくりの根本である。

これからの道徳授業は、発達の段階に応じ、道徳的諸価値についての理解を基に、道徳的な課題を一人ひとりの児童生徒が自分自身の問題と捉え、「主体的・対話的で深い学び」のある授業を構想し、質の高い授業に質的転換を図ることが求められている。

これまで以上に自分との関わりで捉え、多面的・多角的に考えていく授業が大切になる。

（３）「C」—道徳授業の評価（Check）

道徳科の評価は、児童生徒の道徳性を評定することではない。道徳科における評価とは、『道徳科における「主体的・対話的で深い学び」となるような道徳授業』が展開されているかということであり、指導に生かされ児童生徒の成長につながる評価である。つまり、教師が「主体的・対話的で深い学び」のある授業改善を行うための資料となる評価であり、児童生徒のよい点や成長の様子などを積極的に捉え、認め励ます評価である。

道徳科は、よりよく生きるための基盤となる道徳性（内面的資質）を育てることをねらいとしていることを忘れてはならない。

道徳授業においては、児童生徒に主体的に考えさせることを明確にして、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己（人間として）の生き方についての考えを深める」学習が展開されていなければならない。

そのためには、児童生徒にどのような気づきや変容が見られたのかを確認する必

要がある。道徳授業の観点でもある「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか（対話的な学び）」「道徳的価値を自分自身との関わりの中で深めているか（主体的な学び）」そしてねらいとする道徳的価値の視点から「自己（人間として）の生き方について考えを深められたか（深い学び）」という観点から自らの授業を振り返り、児童生徒の学びの姿から道徳授業を捉え直すことである。

（４）「A」—道徳授業の改善（Action）

「主体的・対話的で深い学び」という授業改善の視点から、より質の高い、より効果的な指導を追求することが重要である。そして、忘れてはならないのが、よりよく生きるための基盤となる道徳性が育っているのかを検証することである。そのためには、教職員が一体となって（チーム学校として）、次に示す児童生徒の学びの姿を検証することが必要である。児童生徒にとっての主体的な学びの主な姿とは、自らの考えをもち、考えを発言したり、書いたり、ときには教材や教具を使って表現したりするような真剣に考える姿である。対話的な学びの姿とは、友達や教師等と話し合ったり、ときには自分の心の中で自問自答したりする姿である。また、ねらいとする道徳的価値について、教師が明確な意図をもって授業を行うことで児童生徒の深い学びの姿につながる。児童生徒の道徳性を育むには、「主体的・対話的で深い学び」の姿に向かって授業改善を行い、多様な価値観を獲得させることを通して道徳性を養うことである。

成果と課題について共通理解を図ったり、校内研究等を通して深めたりして、質の高い道徳授業を目指し、学校が一つのチーム（チーム学校）として道徳科におけるカリキュラム・マネジメントの実現に取り組むことである。つまり、アクションを起こすことである。

6 おわりに

道徳科におけるカリキュラム・マネジメントの実現とは、チーム学校として道徳教育推進教師を中心とした協力体制を整備し、教師が常に学習指導過程や指導方法を振り返りながら、児童生徒の学習状況の把握を基に、授業に対する評価と改善を行うことである。

つまり、道徳性を養うことを目的とする道徳科においては、チーム学校で、学習指導過程や指導方法を工夫しながら、道徳科の「主体的・対話的で深い学び」を構想し、その指導の工夫により表出した児童生徒の学びの姿を継続的に把握し、教師が自らの指導を評価し、その評価を授業の中でさらなる指導に生かすように授業の改善を図っていくことである。

引用・参考文献

- 毛内嘉威 編著『道徳授業のPDCA —指導と評価の一体化で授業を変える—』明治図書、2018年12月
- 毛内嘉威 編著『アクティベート教育学 道徳教育の理論と実践』ミネルヴァ書房、2020年4月
- 毛内嘉威 編著『「特別の教科 道徳」～授業力向上への一歩～』株式会社美巧社、2020年9月